

Elizabethan Travelling Players (In Honour of Professor Kazuto Ono and Professor Minoru Hirota On the Occasion of Their Retirement)

Kazuaki Ota
Faculty of Language and Cultures, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/1326482>

出版情報：英語英文学論叢. 53, pp.33-61, 2003. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

エリザベス朝の旅役者たち*

太田 一 昭

エリザベス朝は旅役者の時代

シェイクスピア学は汗牛充棟である。シェイクスピア劇に対する関心の大きさに比例して、エリザベス朝の演劇状況についての研究もさかんである。エリザベス朝演劇研究と言えば、ロンドンの演劇研究と相場が決まっている。シェイクスピアはロンドンの劇場に本拠を置く劇団の座員であったから、学者の目はいきおいロンドンの演劇に向いたのである。しかしロンドンの演劇を中心に据えた研究では見えにくいエリザベス朝演劇の相がある。エリザベス朝は旅役者の時代であったということである。たしかにロンドンは当時最大の演劇市場であった。だが芝居が打たれたのはロンドンではなかった。この時代、地方を巡業する劇団は引きも切らず、地方の市や町や村はロンドンにおとらず重要な興行地であった。エリザベス朝は旅役者の時代—これはエリザベス朝演劇史の盲点であった。本稿の目的は、この従来見落とされがちであった旅回り劇団の活動を跡づけることである。

これまで地方巡業は論じられなかったと言うのではない。たとえばE. K. Chambersの名著*The Elizabethan Stage*¹はエリザベス朝の劇団について詳細に記しているが、その記述は各劇団の地方巡業まで及ぶ。Chambersも参照したJ. T. Murrayの*English Dramatic Companies 1558-1642*²も旅回り劇団に関する貴重な情報を提供してくれる。しかしこのような古典的文献が存在したにもかかわらず、地方巡業がシステムティックに研究されることはほとんどなく、まして地方の演劇活動とロンドンでの興行とが同列に論じられるはずもなかった。このような状況は、マローン協会が地方興行関係記録集(*Collections*, vol. 2, pt. 3; vol. 7; vol. 8; vol. 11)³を出版したのちもさほど変

* 本研究は、平成14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の交付を受けている。

1 E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, 4 vols. (1923; Oxford: Clarendon P, 1961).

2 J. T. Murray, *English Dramatic Companies 1558-1642*, 2 vols. (1910; New York: Russell & Russell, 1963).

らなかった。これに強烈な揺さぶりをかけたのが、REED (Records of Early English Drama) と称されるプロジェクトによる初期英国演劇関係資料集の刊行である。このプロジェクトは、英国各地に残存する中世から1642年までの演劇関係一次資料（旅役者・旅芸人に対する公演料支払記録、公演許可、公演禁止、退去命令、等々）を調査・収集・出版することを目的としている。1979年にヨーク市の記録⁴が出版されたのを皮切りに、現在までに15巻（19冊）の記録集が出版されており、第16巻が近刊の予定である。REEDプロジェクトの成果はすでに1980年代から英国ルネサンス演劇史研究に断片的に取り入れられていたが、90年代以降その影響が顕著に現れてきた。近年刊行された多くの論考がこのプロジェクトにより収集・出版された一次資料を利用している。たとえばAndrew Gurrの*The Shakespearian Playing Companies* (1996)⁵やScott McMillinとSally-Beth MacLeanの共著*The Queen's Men and their Plays* (1998)⁶ *The Shakespearian Playing Companies* の第3章では旅回りが論じられているが、論述にREEDの資料が大いに利用されている。この章にかぎらず本書のいたるところでGurrはREEDの成果を活用し、劇団の地方巡業に目配りをきかせつつ、レスター伯一座や女王一座といった劇団のありようを描出している。本書刊行の4年前にGurrは、*The Shakespearean Stage, 1574-1642* 第3版 (1992)⁷ を出版している。このときのGurrはまだロンドンの演劇を中心に記述しており、当時の通説をなぞっているだけのようだ。ところが96年の*The Shakespearian Playing Companies* では打って変って、地方巡業をがぜん重視する。劇団史の泰斗でさえREEDの影響を受け、劇団情報の大幅更新を迫られたのである。*The Queen's Men and their Plays* は、エリザベス朝随一の旅回り劇団であった女王一座の巡業の政治的・社会的意味を探った好著であるが、その論証はREEDの資料を（未刊行のものを含めて）縦横

3 Vol. 2., pt. 3: "Players at Ipswich" (1931) ; vol. 7: "Records of Plays and Players in Kent" (1965) ; vol. 8: "Records of Plays and Players in Lincolnshire, 1300-1585" (1969) ; vol. 11: "Records of the Plays and Players in Norfolk and Suffolk, 1330-1642" (1980/81).

4 Alexandra F. Johnston and Margaret Rogerson, eds., *Records of Early English Drama: York*, 2 vols. (Toronto: U of Toronto P, 1979).

5 Andrew Gurr, *The Shakespearian Playing Companies* (Oxford: Clarendon P, 1996).

6 Scott McMillin and Sally-Beth MacLean, *The Queen's Men and their Plays* (Cambridge: Cambridge UP, 1998).

7 Andrew Gurr, *The Shakespearean Stage 1574-1642*, 3rd ed. (Cambridge: Cambridge UP, 1992)

に駆使している。本書の執筆者のひとりSally-Beth MacLeanは、REEDプロジェクトの責任編集者であり、1980年代から劇団の地方巡業に関する論考を発表してきた。MacLeanにしてみればREED資料はいわば自家薬籠中のものであった。REED資料に依拠している点では拙稿も同じである、と言うより、REEDなくして本稿は存在しえなかった。

本稿ではまず、エリザベス朝ロンドンの演劇状況について再検証する。地方巡業は、ロンドンの状況と対比することによっていっそう明瞭に理解されるであろうし、逆に地方との対比でロンドンの演劇の理解も深まるであろう。ついで地方巡業に関する旧来の学説を再検討する。従来、劇団の地方巡業は疫病流行との関連で理解されることが多かった。本稿は地方巡業が必ずしも疫病とかかわりなかったことを強調し、こう論じる。ロンドンでは当時のイングランド最大の演劇市場であったとはいえ、すべての劇団に等しく開かれた市場ではなかった。多くの劇団が疫病とはかかわりなく地方巡業をした、あるいはせざるをえなかった、と。つぎにロンドン演劇市場中心型の劇団と地方巡業劇団とを区分けし、興行場所の点から各劇団の特徴を記述する。結論はおおよそ次のようになる。1590年代後半の宮内大臣一座と海軍大臣一座は典型的なロンドン中心型劇団である。特に宮内大臣一座は地方巡業依存率が著しく低い劇団であった。1570-80年代のレスター伯一座と1583年結成のエリザベス女王一座は当時のエリート劇団であって、宮廷上演やロンドン公演も多かったが、ロンドンの常設劇場を本拠としていたのではなかった。両劇団はロンドンで公演し、しかも地方を頻繁に巡業した。特に女王一座の旅回りは異常に多く、また地方において破格の待遇を受けた劇団であった。この劇団の活動の中心はおそらく地方巡業であった。ロンドンでの公演機会の多かった劇団は当代屈指の劇団である。そのパトロンは枢密顧問官や有力貴族や廷臣であったが、こういう劇団の多くはまた地方巡業もさかんにいった。彼らにとってロンドン是最も重要な興業地であったが、地方もロンドンにおとらず重要であった。旅回りは特殊な興行形態ではなく、通常の興行スケジュールに組み込まれていた。巡業に出ることが少なかった1590年代後半の宮内大臣一座は、そういう意味で例外的な劇団である。エリザベス朝劇団のうち大半は、ロンドンでの活動記録がない「地方劇団」である。こういう「地方劇団」は大体において活動の範囲が狭いが、シャンドス卿一座のように、主要劇団なみに広範囲を巡業した劇団も存在する。劇団の巡業範囲はパトロンの影響力の大小に左右されたのかもしれない。女王や権勢ある枢密顧問

問官をパトロンとする劇団の活動エリアは広く、巡業地はイングランド各地に及んでいる。

ロンドンの劇場と劇団

1576年、イングランド最初の本格的な常設劇場がロンドン市郊外のショアディッチに建設された。その名をシアター座 (The Theatre) と言う。翌77年には同地区にカーテン座 (The Curtain) が建てられ、1587年にはローズ座 (The Rose) がテムズ川南岸のサザック地区に建設された。1590年代に入るとシェイクスピア (1564-1616) が劇作家として活動を開始し、ここにエリザベス朝イングランド演劇は隆昌の時代を迎え、ロンドンはイングランド演劇の一大中心地となった。

ある推定によると、⁸1582年のロンドンの人口は120,000、1603年の人口は200,000であった。この人口はエリザベス朝イングランドで突出している。当時ロンドンにつぐ「都市」と言えば、ノリッジ、ブリストルである。17世紀初頭の推定人口は、それぞれおよそ15,000、12,000である。他にヨーク市が11,500、エクセター市が9,000、2つの大学所在地のオクスフォード市とケンブリッジ町は、それぞれ約6,500であった。

このように他を圧倒する人口を擁するロンドンがイングランド演劇の中心地となったのは、自然の成り行きである。この都市は職業劇団にとって魅力的な演劇市場であった。しかしロンドンはすべての劇団に等しく開かれた市場ではなかった。エリザベス朝ロンドンでの活動記録が残る成人劇団及び少年劇団の総数は30を超えるが、これはエリザベス朝通算の数字であって、常時これだけの劇団がロンドンで活動していたのではない。ロンドンで公演できる劇団は実は、少数であった。

1578年8月、ジョン・ストックウッドは、セント・ポール大寺院の境内で、主日 (すなわち日曜) の公演を非難する説教を行った。説教のなかでストックウッドは、役者たちが通常8箇所まで公演していることに言及している。⁹ また同年12月、枢密院は、ロンドン市長に、クリスマスの宮廷上演を予定し

8 Rosemary O'Day, *The Longman Companion to the Tudor Age* (London: Longman, 1995) 164.

9 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 200.

ている6劇団のみに市内上演を許可するよう求めた。¹⁰ちなみに、その6劇団は以下のようなものである。

チャペル・ロイヤル少年劇団
サセックス伯（宮内大臣）一座
ウォリック伯一座
レスター伯一座
エセックス伯一座
セント・ポール少年劇団

枢密院が市内の劇団数を6に限定するというのは、6を越える劇団が現実に存在していたからである。1590年代と比較するとずいぶん多い。1599年9月18日から10月20日までイングランドを旅したバーゼルのトマス・プラッターは、次のように証言している。

こうして毎日ロンドン市では午後2時に2本の、時には3本の劇が別々の場所で行われている。そこで人々はいっしょに浮かれ騒ぐのである。いちばん面白い芝居をやるところが最大の観客を集める。劇場内の舞台は一段高く作られていて、そこで芝居が演じられるので、演技はどこからでもよく見える。しかしいくつかに分かれた棧敷席があって、そこではもっと快適に立ち見ができるし、また座することもできる。が、席料は高くなる。平土間立ち見の客は、わずか1ペニーの入場料を払うだけである。座って見たければ、ドアから中に入れてもらえるが、入ったところでもう1ペニーを払わねばならない。¹¹

プラッターの記述する劇場は、その構造からして、常設劇場である。プラッターは上記引用文のすこし前でその所在地を「ビショップスゲイト」と述べているから、この劇場はカーテン座であった可能性が高い。（他の上演場所はおそらく、グローブ座、ローズ座であろう。¹²）プラッターの言う「別々の場所」が各劇団の専用劇場であったとすると、90年代末の劇団数は

10 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 278.

11 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 365.

12 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 366.

わずかに2、あるいはせいぜい3にすぎない。70年代末と比較すると半数以下である。がしかし、1590年代後半の総上演本数が70年代より少なかったとは言えない。前記ストックウッドは、1578年に、「少なく見積もっても、自分が知っている市内の通常8つの場所で役者たちが1週間に1回の公演で（と言っても実は、しばしば週2回、時には3回公演するのだが）稼ぎ出す金額は、年間2,000ポンドに達する」¹³と述べている。すなわち、ストックウッドが事実を語っているとすれば、1570年代末の週上演回数はせいぜい2あるいは3回である。これに対して1599年には、プラッターの証言によれば、毎日公演が行われている。¹⁴つまり劇団の公演頻度は倍以上である。だとすれば、90年代末の上演総数は70年代とさほど変わらないのである。

演劇を敵視するロンドン市

Alfred Harbageは、ロンドンの劇場の1日平均観客数を、約2,500(1595年)、3,000(1601年)、3,500(1605年)と推定している。¹⁵公衆劇場の収容能力はこれよりずっと多い。当時ロンドンで開場していた劇場数は、(室内劇場を除き)公衆劇場に限っても最低2であって、1公衆劇場の収容者数は2,000-3,000であった。¹⁶となれば、収容力には余裕があるのであって、Harbageの推定が正しければ、結局2,500-3,500がほぼ当時のロンドンの1日平均演劇人口だと言えよう。潜在的な観客数はこれより多かったかもしれないが、これくらいの演劇人口では多数の劇団の共存は難しい。当時は現代と違って大衆娯楽は少なかったとはいえ、演劇だけが娯楽ではなく、他にたとえば熊いじめのようなたいへん人気の高かった見世物があった。加えて、この限られたパイをさらに小さくするような事情があった。ロンドン市が大衆演劇を敵視し、折あらばこれを禁圧しようとしたのである。1592年2月25日、ロンドン

13 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 200.

14 ヘンズロウの「日記」もこれを裏づける。「日記」に記されたローズ座におけるストレインジ卿一座-海軍大臣一座の公演収入記録によれば、1590年代には、日曜を除きほぼ毎日公演が行われている。記録の欠落した期間もあるが、これは多くの場合、疫病流行その他の理由で一座がロンドンを離れ地方を巡業したからだと思われる。R. A. Foakes and R. T. Rickert, eds., *Henslowe's Diary* (Cambridge: Cambridge UP, 1961) 55-60.

15 Alfred Harbage, *Shakespeare's Audience* (1941; New York: Columbia UP, 1969) 37-38.

16 柴田稔彦、「エリザベス朝の観客一瞥書」、日本シェイクスピア協会編『シェイクスピアの演劇的風土』（研究社、1977）99。

市長は、カンタベリー大主教ウィットギフト宛に、演劇禁止を求める請願書を送った。

我らが崇敬する大主教祝下、懼れながら申し上げます。当市には幾つもの劇場が建設され、多数の役者たちが日々、無秩序に芝居を打ち、この為当市の若者たちの墮落甚だしく、その振舞いは、数多の悪しき、邪悪なる性質に冒されており。と申しますわけは、不謹慎な、神を冒瀆する出し物が役者たちによって舞台上で演じられるが故に徒弟や召使たちが仕事を怠り、又一般市民が皆日々の説教や他のキリスト教の礼拝から遠ざかるようになっているからであります。これが当市の取引や業者に多大の障害を齎し、我らが確立した聖なる宗教を冒瀆しております。かような場所には通常、娼婦、掏摸、詐欺師、こそ泥といった下賤の、邪な気質の輩が大挙して押し寄せるのでありますが、連中は芝居見物と称して参集し、様々の悪しき、神に背く取引をし、謀議をこらし、陰謀を企むのであります。これらの悪事は、劇場がそのような機会を提供するが故に防ぐことも発見することもできぬのでございます…。¹⁷

そこで大衆演劇の廃絶のため助勢を願いたい、と書簡は続くのだが、この手の反対理由というのはロンドン市がよく掲げるものだ。もうひとつ、上掲の請願書より少し古い、同種の文献を紹介しておこう。1574年12月6日、ロンドン市議会は、市管轄区域での芝居上演を制限する条例を制定した。この条例も、冒頭に、大衆演劇の害悪を列挙する。

従来多数の市民特に若者が劇やインターロードや見世物の見物に訪れること甚だしく、故に諸々の騒動や不都合が当市に発生している。即ちこれらの芝居や見世物は、乱闘や喧嘩、大宿屋での邪な淫行の因をなしているのである。これらの宿屋には、幕なし舞台や棧敷に接して客室や秘密の場所があり、女子特に孤児や善良な市民の子女が誘惑されて密かに背徳の約束を結ぶ。芝居や見世物は従前には主に日曜と聖日に演じられたのであるが、淫らで不快、不謹慎な言葉や行為を世に喧伝し、女王陛下の臣民をして日曜聖日の礼拝から遠ざけ、貧者愚者をして金を浪費

17 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 307.

せしめる。財布の抜き取り、切り取り盗難が何件も発生している。芝居は又、低俗なる、差し出がましい煽動的な事柄、その他多数の、若者を墮落させることや忌々しき悪事を語るのである。加えて、舞台や枠組みの崩壊や劇中使用される仕掛けや武器や火薬の事故により、女王陛下の臣民が多数死傷している。天罰が降り疫病が流行している折には、大人数の密集により疫病が蔓延する危険がある…。¹⁸

ロンドンの演劇敵視の姿勢は、エリザベス朝を通じて一貫している。そういう市当局からの攻撃をさけるために、劇場は市郊外につくられた。周知のように、シアター座やカーテン座が建設された地区は、市当局の管理の及ばぬ特別管区 (liberty) であった。¹⁹しかし市外の特別管区は、観客を多く集めなければならない劇場用地として理想的とは言えない。カーテン座は市城壁の北門のひとつビショップスゲイトから約半マイル (800メートル) の距離にあり、シアター座は、カーテン座よりさらに200メートルほど北方に位置していた。シェイクスピアの所属劇団宮内大臣一座が1599年に建てたグローブ座は、テムズ川の南岸にあった。ロンドン橋の市側の端からこの劇場までの距離もおよそ半マイルである。いずれの劇場も市中心部からさほど遠くはない。またボートを使えばテムズ川南岸に移動するのは容易だ。事実ボートでテムズ川をわたるロンドン市民は多かったという。²⁰しかし郊外はやはり町外れであって、市城壁内ほど便利ではない。そこで劇団はロンドン市内の宿屋や広場での上演の許可を市当局に求めた。特に冬場は、市中公演は劇団にとって魅力的であった。これがロンドン市と役者たちとの軋轢をひき起こした。ロンドン市は市郊外の常設劇場での公演ですら禁止されるべきだと考えた。しかしそこは州治安判事の管轄下であって、ロンドン市の警察

18 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 273-74.

19 “liberty” の意義については、Virginia Crocheron Gildersleeve, *Government Regulation of the Elizabethan Drama* (1908; New York: Burt Franklin, 1961) 142-46参照。本橋哲也、「川向こうの歓楽一劇場と周縁一」、『シェイクスピアリナーナ』第10巻、56-77は、エリザベス朝の商業劇場が建設された“liberty”という「場」の政治的・社会的意味を(中心と周縁といった、二項対立的図式化を否とする視点から)探る論考だが、この中で(63-66)、“liberty”あるいは“liberties”の辞書的意味と歴史的意義を詳述している。

20 William Ingram, *A London Life in the Brazen Age: Francis Langley, 1548-1602* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1978) 106. Cited in Roslyn Lander Knutson, *Playing Companies and Commerce in Shakespeare's Time* (Cambridge: Cambridge UP, 2001) 37.

権の及ばない地区であったから、市当局は枢密院に郊外の劇場での公演禁止を請願した。一方ロンドン市内は一部の特別管区を除き市当局の管理下にあったから、ここでの公演は極力禁止しようとした。そしてもちろん城壁外のロンドン市管轄地区（ここもlibertyと称された）においても、演劇を禁圧しようとした。しかし役者たちは枢密顧問官など当代の有力者に庇護されていた。役者たちは宮廷・政界に顔のきくパトロン（たとえばレスター伯やウォルシンガムといった枢密顧問官）を通じて、城壁外市管轄区域や市中（城壁内）公演の許可を求めたのである。

エリザベス朝のエリート劇団

だがしかし、そのような有力者に庇護され、ロンドン市内外で公演を行うことのできる劇団は、ごく一部の、特権的なエリート劇団であった。そのような特権劇団の代表格が1583年に結成されたエリザベス女王一座である。1583年11月28日、ロンドン市参事会は、市中公演を求める女王一座に、懺悔季節（Shrovetide）までの上演を許可した。²¹ もっとも、公演場所については制限が付せられていて、当初上演が認められたのはビショップスゲイトとグレイシャスストリートの、それぞれ「雄牛」と「鐘」の看板の場所（いわゆる「宿屋劇場」）だけであった。女王一座は翌1584年（あるいは1585年）の11月にも枢密顧問官を通じて市中公演の許可をロンドン市に求めているが、このときロンドン市当局が枢密院に宛てた書簡によると、前年女王一座に、正確に言えば女王一座だけに市中公演の許可が下されたときに、女王一座の名を騙る劇団が市内各所に出没したという。ロンドン市は、そのような事態が再び出来るのを避けるため女王一座の分割公演を禁止すべきだと枢密院に訴えた。

1590年代の特権的な劇団は海軍大臣一座と宮内大臣一座である。プラッターがロンドンで観劇した90年代末は、海軍大臣一座と宮内大臣一座によるいわゆる2劇団制が敷かれていた時期である。枢密院は1597年から1598年2月までのある時点で、両劇団以外の劇団のロンドン公演禁止令を出した。以

21 E. K. Chambers, "Dramatic Records of the City of London: The Repertories, Journals, and Letter Books," *Collections*, gen. ed. W. W. Greg, vol. 2, pt. 3 (London: Malone Society, 1931) 314-15.

後の数年間は特殊な時期でロンドン公演が許される劇団は特に少なかったのであるが、シェイクスピアが活躍をした、1590年代の初めからジェイムズ朝にかけてロンドンを本拠地とする劇団の数は、多いときでも4-5であった。ロンドンで芝居を打てるのが少数の劇団に限られていたとすると、他の劇団はどうするか。ロンドン演劇市場に食い込むことができなければ地方に活路を見出すしかない。かくて地方こそは彼らの興行地となったのである。

疫病流行と旅回り

エリザベス朝演劇の研究といえばロンドンの演劇の研究であったと冒頭に述べた。地方巡業は周辺のなものとしてしか扱われてこなかった。旅回りは疫病流行時などの緊急避難的な活動であるとして片づけられることが普通であった。Andrew Gurrはかつて、役者たちがロンドンを離れ旅回りせざるをえなかったのは通常、疫病のためにロンドンでの公演が禁止されたからだと書いた。²²Gurrはさらに記している。エリザベス女王一座が結成された1583年以降の数年間、レスター伯一座ほか、ロンドンで公演できる劇団すなわちサセックス伯一座、ウォリック伯一座、エセックス伯一座、オクスフォード伯一座は、ロンドンで可能なかぎり公演を行い、毎年夏には地方を巡業したのである、と。²³また玉泉八州男は、レスター伯一座は「疫病が蔓延する夏場には決まって8週間程度」旅回りを余儀なくされたと述べている。²⁴ここで両氏は演劇史の常識を語っている。この通説は一概に誤りとは言えない。というのも、疫病流行により地方巡業を余儀なくされることがあったのは事実だからである。

シアター座が建設された1576年から女王没年の1603年までの期間に少なくとも10回、疫病がらみのロンドン市内・郊外での公演禁止枢密院令が発せられている。そのおよそ半数が夏期の公演禁止令である。他は、春季、秋季、冬季である。枢密院令は、疫病蔓延のためあるいは蔓延のおそれがあるとして、ロンドン市内外、たとえば市5マイルとか7マイル以内での公演を禁止した。ロンドン市5マイル以内といえば、シアター座、カーテン座は言うに及ばず、ロンドン橋より南方およそ1マイルにあったニューイントン・バツ

22 Gurr, *Shakespearean Stage*, 29.

23 Gurr, *Shakespearean Stage*, 31.

ツの劇場まですっぱりと入ってしまう。ロンドン市中、市郊外での公演が不可能となれば俳優たちは地方を巡るしかない。また夏期に疫病が発生しやすいとすれば、地方巡業が夏場に多くなるのは当然かもしれない。

1593年は疫病が猖獗をきわめた年である。この年、ロンドンでは長期にわたって劇場が閉鎖されていたと推測される。1月28日には、ロンドン市7マイル以内での公演が禁止された。²⁵ 93年のヘンズロウの興行記録は、2月1日から12月26日まで欠落している。ローズ座を本拠とする海軍大臣一座はこの年、コヴェントリーやヨーク、バースやブリッジウォーターを巡業した。²⁶ 同年4月29日には、サセックス伯一座に、ロンドンから7マイル以上離れた、疫病の流行していない州、市、町において、公演を行うことを許可する認可証が与えられている。²⁷ サセックス伯一座は、8月、ヨークに巡業し、市より40シリングを報酬として受け取った。²⁸

ストレインジ卿一座は、同年、ブリストルやバースを巡業している。この巡業団の一員であったと思われる（海軍大臣一座の）エドワード・アレンはブリストルから、前年秋に結婚したばかりの新妻ジョーンに、つぎのような私信（8月1日）を書き送った。

愛しい妻よ、元気だろうね。両親とベスによろしく。おまえの周りで疫病が流行っているが、神様の慈悲により、家が疫病を免れるよう祈っている。どうか家をきれいに、清潔にしておいてくれたまえ。おまえならきっとそうしてくれるだろう。毎晩入り口と裏庭に水をまき、窓のところにたくさんのヘンルーダを置いておくように。神様の慈悲におすがりし、しっかりとお祈りを捧げるのだ。そうすればきっと神様が哀れんでくださり、おまえを守ってくださるだろう。かわいいおまえ、いまのところ特に耳新しいことはない。私たちはみんな元気でやっている。こ

24 玉泉八州男、『女王陛下の興行師たち』（芸立出版、1984）31-32。劇団が夏期にはきまって旅回りをしたという説には、すでにLeeds Barrollが疑義を呈している。See Leeds Barroll, *Politics, Plague, and Shakespeare's Theater* (Ithaca: Cornell UP, 1991) 227-32.

25 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 313.

26 R. W. Ingram, ed., *Records of Early English Drama: Coventry* (Manchester: Manchester UP, 1981) 338; Johnston and Rogerson, *York*, 455; Robert J. Alexander, ed., *Records of Early English Drama: Somerset, including Bath* (Toronto: U of Toronto P, 1996) vol. 1, 17, 54.

27 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 94.

28 Johnston and Rogerson, *York*, 455.

れも恵み深い神様のおかげだ。手紙をありがとう。手紙はプリストルでリチャード・カウリーから受け取った。この手紙を持参するトマス・ポーブの縁者に私の胴着を託けている。胴着をあちこちもち歩くのはわずらわしいのだ。この手紙といっしょに受け取ってくれ。私が帰宅するまでしまっておいてくれ。私に手紙を送るときにはシュローズベリーの配達人に頼むか、あるいはウェスト・チェスターかヨークに送って、ストレインジ卿一座が到着するまでそこに留め置くようにしてくれたまえ。愛するおまえ、私たちの友人みんなによろしく伝えておいておくれ。ここで筆を置くことにしよう。聖ヤコブ祝日後の水曜日、プリストルにて。コーンウォールのヘンリーの芝居を打つ予定だ。グリグズさん夫妻とご家族のみなさんに、そしてフィリップスによろしく。

おまえの忠実なる夫エドワード・アレン

愛しい妻よ、おまえの手紙では家のことがさっぱり分からない。家の出来事を、おまえの蒸留水がどうなったかとか、あれこれ何でもよいから知らせてくれ。

ジャグ [アレンの妻ジョーンの愛称] よ、黄褐色の毛の靴下を、私が家に戻る前に完全に黒く染めておいてくれ。冬に履きたいのだ。おまえは庭のことについて何も知らせてくれない。ともかくこれだけは忘れないでくれ。9月にパセリが植えてあったところにハウレンソウの種を播くこと。ちょうど播種の季節になるのだ。本来なら自分でやるのだが、諸聖徒日 [11月1日] までには帰れそうにない。では、かわいい妻よ、ごきげんよう、長の旅に忍耐力をもって耐えることにしよう。²⁹

このように、疫病蔓延による劇場閉鎖のために旅回りせざるをえなかったというのは事実である。しかし従来、これを過大視する傾向があった。疫病が流行したために俳優たちは地方巡業に出なければならぬことがあった、というのは正しい。がしかし地方巡業とロンドンにおける疫病とを機械的に結びつけるのは、2つの理由で間違っている。第1、ロンドンの劇場閉鎖は必

29 Mark C. Pilkinton, ed., *Records of Early English Drama: Bristol* (Toronto: U of Toronto P, 1997) 143-44. Alan Somerset, "How Chances it they Travel?" *Shakespeare Survey* 47 (1994): 60は、地方巡業は強いられた辛い旅ではなく比較的快適な「ワーキング・ホリデイ」であったかもしれぬと述べているが、少なくともこのアレンの手紙からは、快適な旅であったとは思えない。

ずしも疫病流行の結果ではなかったからである。第2、エリザベス朝の劇団にとって地方は重要な演劇市場であり、これを主たる活動の場とせざるをえない劇団が大半であったからである。

ロンドン公演禁止令と旅回り

『ハムレット』第2幕2場で、「町の役者たち」(the tragedians of the city) の来訪を告げられたハムレットは、ローゼンクランツに言う。

「どうして彼らは旅回りをすることになったのだ。本拠地のほうが、評判も高まり稼ぎも多くてよかったのだ。」(2幕2場、29-31行)³⁰

これにローゼンクランツは答えて曰く。

「先ごろの騒動 (The late innovation) のために町での公演が禁じられたのだと思います。」(32-33行)

“innovation” が何を意味するかよく分からない。OEDでは「政治的変革」あるいは「反乱」と定義され、Onionsの*Glossary*によれば「騒動」ほどの意である。この台詞はハムレットが創作初演された1600-1601年頃の政治的・社会的事件に言及しているのかもしれない。ローゼンクランツはここで、私設劇場の少年劇団が人気を博し公衆劇場の劇団が守勢に立たされているとも言う。となれば、“innovation” とは、何か「新機軸」の演劇の流行に言及しているのかもしれない。いずれにせよ、ここで注目したいのは実入りのよい本拠地での公演が不可能となり、その結果として旅回りに出たという点である。これは『ハムレット』に登場する役者のみならず、エリザベス朝ロンドンの劇団の置かれた状況でもあった。役者たちはロンドンで芝居が打てない事情が生ずると旅回りを余儀なくされた。疫病流行はそういう事情のひとつであった、あるいはひとつにすぎなかった。そして「騒動」もまた、劇団がロンドンを離れる理由のひとつであった。

30 シェイクスピア劇の幕場行数は、G. Blakemore Evans, textual ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1974) による。

ハムレット推定初演年より遡ること約20年、「騒動」を起こしたために地方巡業を余儀なくされた劇団が存在したことが記録に見える。1581年7月、バークリー卿一座の役者たちがグレイズ法学院の若者と乱闘騒ぎを起こし、法学院のパー・スタファートンとともに投獄された。このときパトロンへのンリー・バークリーは、役者たちのために、ロンドン市長に書簡を認めた。

ロンドン市長殿、最近我が僕たる俳優たちと法学院生との間に諍いが起こりました。騒ぎを惹起したのは法学院の若者であります。私が聞き及んでいる事件につきましては、市長殿のほうが私より詳しくご存じでありましょう。このことにより、俳優のうち数名が拘引されました。この者たちがその不行跡ゆえに投獄に値するのであれば、刑を甘受すべきものと考えます。しかるに彼らはあらゆる点において立派に振舞っておりますし、その逆は考えられぬのであります。ただ彼らは、自分たちの知らぬ市長命令に背いて安息日に公演しただけであります。その点につきましては俳優たちに非があると認めますし、彼ら自身も許しを乞うております。それ故市長閣下には、どうか彼らを赦免くださるようお願い申し上げます。この者たちは、地方巡業に出立し、当市にとどまれば出来るかもしれない争い事やその他の不都合な事態を避けるつもりであります。それ故誓って申し上げますが、この後いついかなる時にも、このことにつきさらに問い質す必要が生じましたる折には、彼らに出頭させ申し開きをさせる所存であります。市長殿に神の御加護がありますように。ストランドの寓居より。1581年。敬具³¹

1592年、すなわち疫病大流行の前年、ローズ座を本拠としていたストレンジ卿一座は、ロンドンを離れ地方を巡業した。一座は92年8月6から19日までの期間にブリストルで公演し、市当局より30シリングの上演料を受領したと記録に残る。³² この数週間前の92年7月23日、違法集会を防ぐという理由で9月29日まで劇場公演を禁止する枢密院令が出されている。³³ おそらくこの禁令のために、ロンドンの劇団は旅回りせざるをえなかったのである。ヘンズロウの「日記」は、1592年2月19日から6月21日まで、そして年末の

31 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 282.

32 Pilkinton, *Bristol*, 142.

12月29日から31日まで、ローズ座で公演が行われたことを記録している。夏期と秋季の記録は欠落している。この年の後半には疫病の流行がしだいに深刻の度合いを増していったのだが、³⁴ 夏期に発せられた、本来疫病とはかわりがなかった禁令が、疫病流行のため年末まで延長されたのかもしれない。この年のクリスマスから新年にかけて、ペンブルック伯一座とストレンジ卿一座は宮廷上演を行ったが、³⁵ 禁令は宮廷上演にあわせて解除されたのだと思われる。

常態としての地方巡業

海軍大臣一座は、1599年9月30日から12月25日までの間にブリストルで市長・参事会員臨席公演を行い、30シリングの謝礼を得た。³⁶ 一座は同年、おそらくブリストル巡業とほぼ同じ頃にバースでも公演し、10シリングを受領した。³⁷ 1599年にロンドンで疫病が流行したという記録はなく、また他の理由で劇場が閉鎖されたという記録も伝えられていない。なぜこの年に海軍大臣一座が地方巡業をしたのかよく分からない。しかし考えてみると、なぜ一座が地方巡業をしたのかと問うこと自体不適切である。いや、海軍大臣一座についてはこの問いは妥当かもしれない。というのも、海軍大臣一座はロンドンのローズ座を本拠としていた、いわば「町の役者たち」であったからだ。しかし他の多くの劇団についてはその問いはおそらく的を外れている。というのも、おそらく大半の劇団にとっては地方こそが主たる演劇市場であって、旅回りはごく普通の興行形態であったからである。彼らにとって地方巡業は、疫病の流行にかかわりなく、あるいはロンドンでの公演の禁令が出ているいなくにかかわらず、彼らの年間スケジュールの主要部分を構成していたのである。ロンドンで公演することの多かった劇団にとっても、地方巡業は疫病の流行や何かの禁令によって強制された緊急避難的な活動とはかぎらなかつた。旅回りは、多くの場合、彼らの興行スケジュールに初めから組み込まれていたのである。

33 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 310-11.

34 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 347.

35 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 107.

36 Pilkinton, *Bristol*, 154.

37 Alexander, *Somerset*, 18.

1572年1月頃、ジェイムズ・バーベッジとその俳優仲間は、パトロンのレスター伯爵に次のような嘆願書を認めた。

誉れ高きレスター伯爵閣下

懼れながら閣下におかれましては、この度の国王布告により、家臣に関する法律の復活施行が令されましたことは、我らが申し上ぐるまでもなく既にご承知のことと拝察致します。我らは閣下の卑しき僕にして日々の請願者そして閣下お抱えの俳優であります。この法律の施行が招来するかもしれぬ諸々の不都合を避けたく、閣下には御迷惑であると存じつつ敢えてお願いを申し上げます。閣下はこれまで我らの慈悲深き主人であられました。今後も閣下の家臣として、日々の従者としてお抱え給ればまことに有り難く存じます。こう申しましても、陛下より更なる俸禄を頂戴したいと囑望しているのではございません。我らの願いは、これまでと同じく、お仕着せと我らが閣下の僕たること証明する認可証とを賜ることでございます。我らは通常年に1度友人の土地を巡業します。他の貴顕お抱えの俳優たちも従来そうしてきておりますが、旅回りには認可証が必要でございます。認可証があつてはじめて、従前と同じく、閣下のお名前で興行できるのであります。我らは如何なる時にも閣下の御命令に服す所存でございます。閣下に神の御加護がありますように衷心よりお祈り申し上げます。

願うは閣下の平安御長命、
気高き貴人のなかの貴人。
御健勝と盛栄隆昌に
知将ネストールの齢を超えられん。

閣下の忠実なる僕
ジェイムズ・ハーベッジ
ジョン・パーキン
ジョン・レイナム
ウィリアム・ジョンソン
ロバート・ウィルソン
トマス・クラーク³⁸

嘆願書は、役者たちが通常年に1度地方を巡業するという。これは彼らの旅回りが突発的・緊急避難的な行動ではなく、予定の活動であったことを雄弁に語っている。しかしこの「通常年に1度」旅回りをするという語句は誤解を招きやすい。「通常年に1度」とはすなわち疫病の流行する夏場に地方を巡業したのだと解されるかもしれない。たしかに現存記録によると、レスター伯一座の地方巡業は夏場が多い。がしかし彼らの地方巡業は夏場だけではなかった。たとえばブリストルを1577年、87年、88年に巡業しているが、訪れたのはそれぞれ10月、4月、6月である。このことは他の劇団についてもおおむね当てはまる。エセックス伯一座もブリストルを巡業しているが、巡業月は9月（1577年）、9月（84年）、3-4月（86年）である。ここに挙げた両劇団の巡業のうち、疫病がらみのものもないではない。たとえば1577年10月のレスター伯一座の旅回り。この年の8月には、疫病の流行を防ぐためとして、ロンドン市特別管区内外での公演禁止枢密院令が発せられている。だが87年、88年の同劇団の巡業、86年のエセックス伯一座の巡業は、疫病とはおそらく無関係である。1584年から91年までの期間については疫病流行の記録はない。86年と87年には、77年と同じく疫病防止を理由とする禁令が出されているが、両禁令の発布は5月であって、これより先に劇団はすでに地方巡業に出ていた。88-91年には、予防的禁令さえ出されていない。またこの期間には、1591年7月25日布告の日曜及び木曜の公演禁止令³⁹を除けば、いかなる公演禁止令も出されていない。レスター伯一座にしろ、エセックス伯一座にしろ、地方巡業は自発的な、おそらく予定の行動であって、必ずしも疫病その他の理由による、ロンドンにおける公演禁止令とはかかわりなかったのである。

ロンドン中心型劇団と旅回り劇団

エリザベス朝の劇団は消長が激しく、離合集散をくり返し、劇団の再編成もさかんに行われた。演劇史の表舞台に登場する劇団の名前もよく変った。たとえばレスター伯一座は、70年代後半から80年代にかけて有力な劇団のひとつであったが、1588年のレスター伯の死によって一座の名は演劇史から消

38 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 86.

39 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 308.

える。この劇団員だった喜劇俳優ウィリアム・ケンプはこの後、ストレインジ卿一座を経て、宮内大臣一座の幹部座員となった。エリザベス女王一座は1583年に当時のレスター伯一座、ウォリック伯一座、サセックス伯一座の俳優を引き抜いて編成された劇団で、結成年から90年代にかけてイングランドを代表する一座であったが、1603年の女王の死とともに劇団は消失した。これらのアメーバのように変容を続ける劇団群の活動を正確に捕捉し記述するのは容易ではない。が、ここであえて、シェイクスピアが劇作家として本格的に活動を始めた1590年頃からエリザベス朝末期までに存在していた劇団を、その興行場所により分類・整理してみよう。

この期間、ロンドンあるいは地方の記録に少なくとも名前が見える劇団の数は30を超える。これらの劇団は、その興行地により3つに分類できる。第1、公演場所がほぼロンドンに限られていて旅回りをすることがほとんどなかったかあるいはひじょうに少なかった劇団。第2、ロンドンで公演し、また宮廷上演を行うこともあったが、同時に地方を巡業することも多かった劇団。第3、ロンドンで公演を行うことは少なく地方こそは主たる活動の場であった劇団。どのタイプの劇団であったかを判別するにはロンドン公演と地方巡業の両方に関する資料の調査が必要だが、これはそう簡単な作業ではない。REEDプロジェクトの進展により、旅回り劇団の動静はかなり分かってきた。しかし意外なことに、これまで演劇史家の関心の中心であったロンドンにおける個々の劇団の活動状況が実は漠としていて、把握しにくい。ヘンズロウの「日記」に詳細な記録の残る海軍大臣一座は例外と言ってよい。多くの劇団については、宮廷上演記録、同時代の演劇関係布令、劇場関連資料、同時代人の言及等から活動状況を推測するしかない。

1590年冬季から1604年春季までに宮廷上演記録に現れる劇団は表1のようである。⁴⁰

40 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 104-18.

Table 1

The number of court performances by playing companies, 1590/91-1603/4

Players \ Years	90-91	91-92	92-93	93-94	94-95	95-96	96-97	97-98	98-99	99-00	00-01	01-02	02-03	03-04
Admiral	2				3	4		2	3	2	3	1	3	5 ⁴¹
Chamberlain					3	5	6	4	3	3	3	4	2	8 ⁴²
Chapel											2	3		1 ⁴³
Derby ⁴⁴										1	2			
Hertford		1											1	
Paul											1		1	1
Pembroke			2											
Queen Eliz.	5	1		1										
Strange	2	6	3											
Sussex		1												
Worcester												1		2 ⁴⁵

宮廷上演は劇団のステイタスの反映であり、上演記録はロンドンにおける劇団の栄枯盛衰を端的に表している。地方巡業のみの劇団が宮廷上演を依頼されることはまずなかったであろうから、宮廷で上演回数が多い劇団はロンドンの主要劇団であったか、ロンドンを本拠地とはしていなくとも、少なくとも宮廷上演が集中するクリスマス期近くにロンドンで公演している劇団であったと思われる。宮廷上演を依頼される劇団に有力なパトロン引きがあったことは言うまでもない。上の表によれば、1590年代前半はエリザベス女王一座とストレインジ卿一座が、後半は海軍大臣一座と宮内大臣一座の宮廷上演回数突出している。83年結成の女王一座、そして90年代後半の海軍大臣一座と宮内大臣一座は、特権的なエリート劇団だと先に述べたが、それは宮廷上演回数からも窺える。世紀の変わり目にセント・ポールとチャペル・ロイヤルの両少年劇団が登場しているのも目をひく。少年劇団は80年代にはかなり活発な活動を展開していたらしく、宮廷上演も多かったのだが、10年ほどの沈黙期間をおいて復活している。

表2は、1590年から1603年（ジェームズ一世即位年）までの、劇団別地方

41 As Prince's.

42 As King's.

43 As Queen's Revels.

44 William Stanley (c 1561-1642), 15th Earl of Derby April 1594.

45 As Queen's.

巡業回数である。

Table 2

The number of visits to provincial cities and towns by travelling players, 1590/91-1603/4

Players\Locations	Bristol	Coventry	Norwich	Ipswich	York	Dev ⁴⁶	Soms ⁴⁷	Suss ⁴⁸	Shrop ⁴⁹	total
Admiral	1	5	1	4	2		7	2	1	23
Berkeley		1							1	2
Beauchamp			2	1					1	4
Burgh			2	1						3
Burrowe					1					1
Chamberlain	1		1 ⁵⁰	1			1		1 ⁵¹	5
Chandos	1	7	3	4	2		4		1	22
Cromwell	1									1
Darcy	1	9					1		2	13
Derby	2	7	2	3	2		2			18
Dudley		3								3
Dutton		1								1
Essex		1		1						2
Euer		1		1	1		1			4
Hertford		1		2			3			6
Huntingdon	1	6	5	1						13
James ⁵²							1			1
Lincoln		4		2	2					8
Lord President ⁵³									2	2
Montagu		1					2			3
Monteagle		5	2		1		1			9
Morley	1	6	1	1				1	1	11
Norris							1			1
Ogle		4			1		1	1		7
Pembroke	4	2	1	3	2		3	1		16
Queen(Eliz.)	6	8	7	13	7	8	14	3	8	74
Sandys						1	2			3
Stafford	1	3		1	1					6
Strange ⁵⁴	2	1					2	1	1	7
Sudder					1					1
Sussex	1	2		1	1					5
Warwick ⁵⁵				1						1
Willoughby		2		3	1					6
Worcester	1	8	3	3	3	2	3	3	2	28

表2はREED⁵⁶とマローン協会編の地方興行関係記録⁵⁷にもとづいている。REEDもマローン協会の資料集も地方巡業の完璧な記録ではない。記録の脱落も少なくなく、旅回り劇団の巡業の実数はこれよりずっと多かったと思われる。しかしそれでもこれらの記録から、おぼろげながら旅回りの全体像が浮かび上がってくる。まず驚かされるのがエリザベス女王一座の地方巡業の頻度が突出していることである。次に巡業回数の多いのはウスター伯一座、ペンブルック伯一座、シャンドス卿一座、海軍大臣一座、ダービー伯一座である。コヴェントリーとノリッジの記録を見る限りでは、ハンティングドン伯一座も多い。ダーシー卿一座もコヴェントリーの訪問回数は、女王一座なみに多い。宮内大臣一座は旅回りの回数そのものがずいぶん少ない。

表2に現れる劇団の中で、ロンドンでの活動記録がわずかでも残るのは次の12劇団である。

海軍大臣一座

バークリー卿一座

宮内大臣一座

ダービー卿一座

エセックス伯一座

46 Devon: Barnstaple, Exeter, Plymouth, Dartmouth.

47 Somerset: Bridgwater, Bath.

48 Sussex: Rye.

49 Shropshire: Shrewsbury, Ludlow, Bridgnorth.

50 40s given to "Kempe the Lord Chamberleyne his seruante" on 8 March 1600. See David Galloway, ed., *Records of Early English Drama: Norwich, 1540-1642* (Toronto: U of Toronto P, 1984) 114-15.

51 As King's.

52 James Stuart; acc. as James I of England in 1603.

53 Henry Herbert (after 1538-1601).

54 Ferdinando Stanley (c 1559-1594), styled Lord Strange from 1572, 14th Earl of Derby Sep. 1593.

55 The Countess of Warwick (?).

56 Pilkinton, *Bristol*; Ingram, *Coventry*; Galloway, *Norwich*; Johnston and Rogerson, *York*; John M. Wasson, ed., *Records of Early English Drama: Devon* (Toronto: U of Toronto P, 1986); Alexander, *Somerset*; Cameron Louis, ed., *Records of Early English Drama: Sussex* (Toronto: U of Toronto P, 2000); Alan B. Somerset, ed., *Records of Early English Drama: Shropshire* (Toronto: U of Toronto P, 1994).

ハートフォード伯一座
 ペンブルック伯一座
 エリザベス女王一座
 ストレインジ卿一座
 サセックス伯一座
 ウオリック伯一座
 ウスター伯一座

上掲の劇団のすべてがロンドンに本拠を置いていたのではない。すでに先に触れたが、このなかで確実にロンドンを本拠地としていたと言えるのは、海軍大臣一座、宮内大臣一座、ストレインジ卿一座だけである。ストレインジ卿一座は90年代前半を代表するロンドンの劇団であった。この劇団の主力俳優が中心となり宮内大臣一座を結成した。シェイクスピア、リチャード・ハーベッジも座員となり、一座は一世を風靡する劇団となった。宮内大臣一座がいつ結成されたのか正確には分からない。ヘンズロウの記録に、1594年6月3日から13日まで海軍大臣一座と宮内大臣一座がニューイングトン・バツで公演したとある。⁵⁷ ストレインジ卿ことファーディナンド・スタンリーは1594年4月に没している。となれば、同年の4月以降、6月までの間に結成されたということになるうか。この新劇団は、ロンドンのシアター座（97-97年はカーテン座、99年以降はグローブ座）を本拠とするロンドン中心型劇団の典型である。

宮内大臣一座は、1603年ジェームズ一世の即位とともに国王の庇護下に入り、国王一座と改称する。国王一座はさかんに地方を巡業した。（このことについては別稿で考察する。）しかしその前身の宮内大臣一座はロンドンを離れることが極端に少ない劇団であった。上掲の表からも明らかなように、宮内大臣一座はほとんどロンドンに居座っている。これは、エリザベス朝において例外的な興行形態である。この時代、ロンドンを本拠地とする劇団は少なかった。ロンドンで公演することの多かった劇団でもしばしば地方を巡業した。そういう時代にあつて宮内大臣一座はロンドンを離れることがまれ

57 E. K. Chambers, "Players at Ipswich," *Collections*, vol. 2, pt. 3 (London: Malone Society, 1931) 276-81.

58 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 193; Foakes and Rickert, *Henslowe's Diary*, 21-22.

であった。コヴェントリーは旅役者を最も歓待した自治体のひとつであり、ほとんどの有力劇団がこの地で公演しているが、この町の記録に宮内大臣一座の名前が見えないのは象徴的である。女王一座はもちろんのこと、海軍大臣一座も巡業している。しかし宮内大臣一座はおそらくこの地を訪れなかったのである。

海軍大臣一座は、周知のように、宮内大臣一座のライバル劇団であって、ローズ座、フォーチュン座（1600年以降）を本拠としていた。宮内大臣一座より旅回りの回数は多いが、90年代後半の地方巡業は少ない。海軍大臣一座は、宮内大臣一座とともに、エリザベス朝末期のロンドンの演劇をリードした劇団であった。

ウスター伯一座は90年半前半は旅回りの比重が大きかったかもしれない。この劇団の90年代前半のロンドンでの活動状況は不詳である。一座は1602年にボアズ・ヘッド館でオクスフォード伯一座との合併公演を行う許可を得て、宮内大臣一座、海軍大臣一座につぐ、第3のロンドンを拠点とする成人劇団となった。⁵⁹

ペンブルック伯一座は、旅回りもロンドン公演も行った。90年代後半のペンブルック伯一座は、前半とは座員もかわっていて、言うなれば「新」ペンブルック伯一座であった。この劇団は旅回りも多かったが、ロンドンを活動の拠点にしようとしたのは間違いない。ヘンズロウの「日記」に、ペンブルック伯一座が1597年10月11日海軍大臣一座とローズ座で公演を始めたとあり、⁶⁰また1600年10月28日ローズ座で公演を始めたとある。⁶¹

サセックス伯一座は、1592年1月2日に宮廷上演を行っており、1593-4年にローズ座で公演した記録が残っているが、その後しばらく記録から消える。92年に宮廷上演を行ったサセックス伯一座は、ヘンリー・ラドクリフ（9代目サセックス伯）の庇護を受けていたが、トマス・ラドクリフ（8代目サセックス伯、1572年から1583年まで宮内大臣）をパトロンとしていた同名の劇団は、宮廷上演回数から窺えるように、70年代後半から80年代前半において、チャペル・ロイヤルとセント・ポールの両少年劇団、レスター伯一座とならんで、ロンドンで最も有力な劇団であったと思われる。同劇団は、宮内

59 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 334-35.

60 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 132; Foakes and Rickert, *Henslowe's Diary*, 60.

61 Foakes and Rickert, *Henslowe's Diary*, 164.

大臣サセックス伯が1583年に没すると衰微し、以後ロンドンから地方劇団へと転じたようである。⁶² が、ロンドンで公演することもあった。92年1月には宮廷上演を行った。また93年の12月から約6週間、おそらくローズ座で上演し、94年のイースターにも、女王一座と（おそらく合同で）ロンドンで公演している。⁶³ この後しばらくサセックス伯一座の動静は不明であるが、再び1602-3年に、コヴェントリーの記録に登場する。この間女王一座に吸収され、地方を巡ったのだという説がある。⁶⁴

バークリー卿一座の役者とグレイズ法学院の若者との乱闘騒ぎについては、すでに触れた。一座のロンドン関係記録で現存するのはわずかにこれだけである。それに対して、地方巡業の記録は多い。一座は1570年代前半から80年代前半に、バースやブリストル、イプスウィッチやコヴェントリーを頻繁に訪れている。この劇団はおそらく地方巡業中心型の劇団であった。

ウォリック伯一座は1580年頃まで伯の名前で巡業したが、以後はオクスフォード伯の庇護下に入ったようである。ウォリック一座もロンドンを本拠地とする劇団であったとは考えにくい。イプスウィッチ町の記録に、1592年3月にウォリック伯一座が来訪し、町から13シリング4ペンスを受領したとある。⁶⁵ ウォリック伯（アンブローズ・ダドリー）は1590年に没しているから、この一座はウォリック伯爵夫人一座であったのかもしれない。伯爵夫人が劇団を抱えていたらしいことは、1594年のロンドン市参事会記録に見える。その記録に、参事会は、お抱え役者たちに関する伯爵夫人の「申し立て」を協議することを決したとある。⁶⁶ この劇団の記録は他に見当たらず、ロンドンに本拠を構える劇団であったとは考えられない。地方巡業の記録もほとんど存在しないことから、地方劇団としてもおそらくマイナーな存在であった。

ロンドンでの活動記録が現存しない劇団は、地方巡業をもっぱらとする「地方劇団」であった可能性が大きい。1590年以降のエリザベス朝劇団のなかでは、シャンドス卿一座、ダーシー卿一座、ハンティングドン卿一座などがこの範疇に入る。そういう劇団がロンドンで公演しなかったと言いきることはできない。宿屋劇場のようなところで散発的に芝居を打つことはあった

62 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 94.

63 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 95; Foakes and Rickert; *Henslowe's Diary*, 21.

64 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 96.

65 Chambers, "Players at Ipswich," 277.

66 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 315.

かもしれない。しかし「地方劇団」がロンドンの演劇市場に食い込むことは難しかった。ロンドンの常設劇場では、政界・宮廷の大立者を後ろ盾とする有力劇団が活動していた。一方に演劇を敵視するロンドン市当局があり、他方に威勢あるパトロンを後ろ盾とする劇団がある。その間隙をぬって弱小劇団が芝居を打つのは容易ではなかっただろう。上述したように、70年代にはオクスフォード伯一座やウォリック伯一座がロンドンで活動していたことが知られる。1587年には女王一座、レスター伯一座、オクスフォード一座、海軍大臣一座がロンドンで公演していたと記録に見える。⁶⁷ 90年代には海軍大臣一座と宮内大臣一座がロンドン演劇市場を席卷する。これらの劇団のパトロンはすべて枢密顧問官かあるいは有力な廷臣であった。

前記オクスフォード伯一座は1580年にシアター座で公演していたことが知られるが、⁶⁸ 地方巡業を主体とする劇団であったかもしれない。しかし散発的にせよロンドン公演や宮廷上演を行うことがあったのは事実で、これにはオクスフォード伯爵という、宮廷と浅からぬ因縁をもつ世襲式部長官の働きかけが与って力あったのだろうと推測される。

ロンドンで公演した劇団に対して、地方巡業専従の劇団のパトロンは大体において主たる居住地が地方であって、宮廷と直接のかかわりをもたぬ貴族であった。そのようなパトロンに仕える劇団にとって最重要の仕事はおそらく、クリスマスや懺悔季といった祝祭の季節にパトロンの城や屋敷で芝居を打つことであった。⁶⁹ それは、ロンドンの、あるいはロンドン公演中の劇団がクリスマス季に宮廷上演を行うことに似ている。その祝祭季の奉仕活動が終われば劇団は義務から解放され、そしておそらく各地を巡業したのである。

エリザベス女王一座とレスター伯一座

巡業の範囲は劇団によって異なる。劇団の巡業範囲はパトロンの影響力の大小に左右されたのかもしれない。⁷⁰ 有力者をパトロンとするロンドンの劇団の巡業範囲は、一般的に言って、広い。エリザベス朝において最も権勢あるパトロンは女王であった。その劇団の巡業範囲はイングランド全土に及び、

67 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 303-4.

68 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 100, vol. 4, 280.

69 Sally-Beth MacLean, "Tracking Leicester's Men: the patronage of a performance troupe," *Shakespeare and Theatrical Patronage in Early Modern England*, ed. Paul Whitefield White and Suzanne R. Westfall (Cambridge: Cambridge UP, 2002) 250.

しかも旅回りの頻度は他を圧倒している。旅回り専従劇団ではないかと思えるほど各地を頻繁に訪れている。疫病の流行もロンドンの劇場の閉鎖も、一座の旅回りの頻度とは関係なかったようだ。それにしても、女王一座は不思議な劇団である。旅回りに専念しているようにみえながら、しかし、一座はけっして「どさ回り」劇団ではなかった。女王一座は地方の市や町において破格の待遇を受けた劇団であって、「どさ回り」という蔑みの語は似つかわしくないのだ。一座はまた、ロンドンでも宮廷でも上演したエリート劇団であった。一座のロンドンでの地歩は、1590年代後半以降宮内大臣一座と海軍大臣一座が優勢になるに反比例して低下したのかもしれない。しかし地方においては、1583年の結成以来エリザベス朝末期までエリート劇団であり続けた。女王一座については別稿で詳しく論ずる予定である。

地方に領地や居城をもつ貴族でも、女王の寵臣や政界の有力者であればロンドンに滞在することが多かったであろうから、そのお抱え劇団が主人の威勢により、ロンドンで羽振りがよくなるのは当然考えられる。たとえばレスター伯一座。一座の巡業活動は旺盛である。⁷¹ この一座より広範囲に巡業したのは女王一座だけである。⁷² しかも各地の公演謝礼は、女王一座は別として、他より高い。そういう意味では突出した巡業劇団なのであるが、女王一座と同じく、ロンドンにおいても有力な劇団であったことは種々の記録から明らかである。1571年12月、ロンドン市は一座の市中公演を認可した。74年5月には、ロンドン市内を含むイングランド全土で公演を行うことを保証する女王特許状が一座に下賜された。76年、一座の看板俳優のジェイムズ・バーベッジはシアター座を建設し、一座はそこで公演した。78年12月、枢密院はロンドン市に、4成人劇団と2少年劇団に市中公演を認めるよう求めたが、レスター伯一座はその4成人劇団の一つであった。1587年1月のウォルシンガム宛書簡（発信者不明）にも、ロンドンでさかんに公演を行っている劇団の一つとして、レスター伯一座の名前が見える。⁷³ にもかかわらず、これを「ロンドンの劇団」と呼ぶのはためらわれる。1570-80年代のレスター伯一座は地方巡業が多く、90年代後半の宮内大臣一座のように、ロンド

70 MacLean, "Tracking Leicester's Men," 250.

71 レスター伯の地方巡業については、Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 2, 88-91参照。

72 MacLean, "Tracking Leicester's Men," 258.

73 Chambers, *Elizabethan Stage*, vol. 4, 304. 他に、女王一座、オクスフォード伯一座、海軍大臣一座の名が見える。

ンの特定の常設劇場で恒常的に上演していたとはとても思えないのである。がしかし、ひとたびロンドンに登場すると、一座はメジャーな劇団として遇され、活動している。これもまたレスター伯という、エリザベス女王の寵臣をパトロンとして戴いていたからだと言えよう。地方においてもパトロンの名は威力を発揮していて、一座は別格の扱いを受けている。レスター伯一座の旅回りについても、稿を改めて詳述する予定である。